

序 災害の記憶と記録

形井秀一

筑波技術大学保健科学部

モンゴルからの帰国便で成田に到着し、空港の建物を出て、送迎専用駐車場 17 番で迎えの車を待っている時に、ターミナルの 2 階のガラスの壁面が揺れ出した。最初、壁の裏側で誰かが飛び跳ねているのかと思う程度で、揺れは、部分的にしか感じなかったが、見る間に、ガラスの壁面全体に広がった。「地震だ」と誰かが叫んだ。100 メートルほど離れた ANA の事務所とターミナルを結んでいる高架のトンネル状の通路も大きく揺れて、必死の形相をした職員がガラス張りの通路の中を右往左往している。私は屋根のない駐車場にいたので身の危険は感じず、そんな周囲の様子を眺めていた。が、空港ビルからは、従業員や旅客が慌てて飛び出し、ビルの前のバスの発着所や道路に何人かづつ固まって、不安そうにビルを見上げている。停車しているバスがゆさゆさと揺れ、大地のきしみが聞こえるようであった。

その時はしかし、まだ、東北にあれほどの大惨事が発生するとは思っても及ばなかった。

迎えの車で空港を離れ、預けてあった自家用車を運転して自宅へ帰る間、ラジオからは避難を呼びかけるアナウンサーの声がとぎれることなく続いた。「できるだけ高いところに逃げて下さい」、「津波は川を上って川上の内陸部まで到達します」。何度も繰り返される同じ呼びかけが、ことの重大さを物語っているようだった。だが、東北の東海岸の危機感と千葉や茨城での車中の自分の感覚との間に、奇妙なギャップを感じ続けていたことを今でも思い出す。ただ、車の運転をしている 1 時間半の間、余震を感じ続けていた。信号機の多くが消えていて、交差点では、一時停車して車の往來を確認しなければならず、交差点には車の長い列ができた。橋の上の渋滞で停車している時は、橋の横揺れを感じ、前の車が早く走り出してくれることを祈った。

2011 年 3 月 11 日から 1 年以上が経過した。

だが、その時の生々しい記憶は薄れることなく残っている。

自宅に戻ると、戸が開いていた食器棚の食器が床に散乱し、棚からは沢山のものが落ちていた。

その足で大学の研究室に行くと、内開きの研究室のドアが 10 センチも開かない状態だった。10 架の本棚から落ちて積み重なった本や書類などで、研究室の中央の空いたスペースは埋め尽くされ、ドアはそれらに押されて動かなかった。10 センチの隙間から左手を入れて、手に触れたものから一つずつ外に取り出して、隙間が大きくなったらさらに奥まで手を入れ、次のものを取り出すということを繰り返した。どれくらい時間がかかったか分からないが、廊下に幾つか本の山ができた頃、身体を入れ込めるだけドアが開けられるようになって、力づくで部屋の中に入った。しかし、そこからは少しも中に進めず、立ち往生した。震災の半年前に大学が行った防災用の処置で、すべての本棚は壁に固定されていたので、書架は倒れていなかったが、中の書籍の多くが落下していた。それらの落下物は 1 メートル以上の高さに積もっていて、3 人で片付けるのに数時間かかった。20 年の間、何年か毎に書架を増やしながらか作り上げた書籍の並びが崩れてしまった。書籍はすべて書架に戻されたが、一度崩れた並びは修正できず、どこにあるか分からない書籍を探し出せない状態が、未だに続いている。

一人一人が異なる 3.11 を経験した。

だがその後、その記憶をどのように抱き続けたかは、異なるだろう。被災地には、様々な形でボランティアが入った。鍼灸・あん摩師も、少なからぬグループあるいは個人が被災地で活動した。私は、茨城県北部で鍼灸・あん摩のボランティアグループに一度帯同させてもらったが、その時に、自分が鍼灸やあん摩の施術を通して、ボランティア活動を継続することは体力的に無理であることを自覚した。

しかし、たとえ自分が直接ボランティアをできなくても、鍼灸・あん摩関係者の災害に対する活動の実態を伝えること、「災害と鍼灸」の「記憶」を残すことが私のできるボランティアだと思いつき、第 6 回社会鍼灸学研究会で、「災害と鍼灸」を取り上げ、全日本鍼灸学会と共催でシンポジウムを開催した。

それをまとめた「災害と鍼灸」シンポジウム・記録集をお届けする。